

平成 30 年 6 月 23 日現在

機関番号：37105

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K21556

研究課題名(和文) 恋愛内で問題となる強い束縛に関する基礎的・応用的研究

研究課題名(英文) The influence of strong bond on romantic relationships

研究代表者

片岡 祥 (Kataoka, Sho)

西南学院大学・私立大学の部局等・実験助手

研究者番号：40643094

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：恋愛内で生じる束縛が関係性に及ぼす影響について、束縛の強度の違いという観点から検討した。研究1では項目反応理論を用いて、「弱い束縛」因子と「強い束縛」因子からなる束縛尺度の開発を行った。束縛尺度は概ね許容できる信頼性と妥当性を示した。開発した束縛尺度を用いて、研究2では弱い束縛と強い束縛が恋愛関係に及ぼす影響について検証した。分析の結果、弱い束縛は恋愛関係にポジティブな影響を及ぼすものの、強い束縛はネガティブな影響を及ぼす可能性が示唆された。恋人に対して生じる支配的な行動の1つである束縛が支配であると捉えられにくい理由として、束縛の強さによってその影響が逆方向であるためであることが示された。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the effects of controlling behaviors on romantic relationships from the view point of the strength of the bond. In Study 1, using item response theory, a scale of weak and strong bonds in romantic relationships was developed to measure the difference in the strength of bond behaviors. The scale's validity and reliability was generally acceptable. Study 2 investigated the influence of weak and strong bonds on romantic relationships using the developed bond scale. The results of the analysis suggested that there was a possibility that a weak bond could have a positive influence and a strong bond could have a negative influence on romantic relationships. These results demonstrate that the positive and negative effects of bond behaviors in romantic relationships depend on the conditions.

研究分野：青年心理学

キーワード：束縛 恋愛 束縛の強度 関係維持行動 デートDV

1. 研究開始当初の背景

(1) 社会的背景

恋人に対する支配的な行動は近年では社会問題の1つとして取り上げられることが多くなっており、大規模な調査研究やレビューが国内外で数多く行われている (Archer, 2000; 内閣府, 2015; Straus, 2008)。恋人から支配行動を受けることは自己効力感の低下や恋愛関係の悪化など様々な悪影響を引き起こし (Jezi, Molidor & Wright, 1996; 片岡・園田, 2016), 最悪の場合は殺人事件へつながることが指摘されている (Shackelford & Mouzos, 2005)。さらに、恋人間の支配は夫婦間へも移行していくことや (O'leary, Barling, Arias, Rosenbaum, Malone & Tyree, 1989), 幼少期における夫婦間の支配行動の目撃経験は青年期の恋人への支配行動と関連するなど (Malik, Sorenson, & Aneshensel, 1997), 恋人間の歪な関係性は一時点だけではなく広範囲に渡り様々な形で問題となっていく。このようなことから、恋人間で生じる支配行動の基礎的メカニズムの解明を通じて防止プログラムの開発に向けた研究が増加しているという現状がある。

一般的に、恋愛は他の関係に比べて相互に強い愛情を持った関係である (金政・大坊, 2003; Sternberg, 1987)。ここから、愛する恋人が不利益を生じるような一方的な支配はなぜ起こるのか、また、そのような行動の被害者はなぜすぐに別れを決断しないのかという疑問 (Rusbult & Martz, 1995) が生まれてくる。本研究はこの問題の解明に取り組むために、恋人への支配的な行動が起きる理由について愛着の観点から検討していった。その上で支配的な行動の内容によって行為者や被行為者の問題認知が異なることに着目し、直接的な暴力を伴わない束縛を取り上げ、束縛の強さの違いによって恋愛関係に異なる影響が生じる可能性について検討を行うものである。

(2) 理論的背景

親密な2者関係を説明する愛着理論 (Bowlby, 1973) を理論的枠組みとして採用した。愛着理論 (Bowlby, 1973) では子どもが危険や脅威に晒され、安心感を確保するために養育者に接近する際に表出する怒りは標準的な反応の1つとされている。子どもにとって怒りの表出は、親の興味や関心を獲得するための方略と言える (Fonagy, Moran & Target, 1993)。親にとって子どもの怒りの表出は、子どもの志向性を理解し世話という反応を引き起こすように働くと考えられている (Fonagy, 1999)。そのため、怒りの表出は2者関係の中で生じる行き違いを調整し、関係維持に貢献するという側面がある。しかしながら Fonagy (1999) は怒りが攻撃性へと変容していく可能性を秘めており、攻撃性は愛着の絆を崩壊させる脅威となることも併せて指摘している。

乳幼児期の親子関係における相互作用がその後の対人関係を規定する認知的な枠組みを構築するという仮定の元に、恋人を主な愛着の対象と見なして展開された成人期の愛着理論 (Hazan & Shaver, 1987, 1994; Shaver & Hazan, 1988) の中でも、怒りの表出それ自体は関係を維持するための行動と捉えられている。Follingstad, Bradley, Helff & Laughlin (2002) によると、怒りを背景とした恋人への支配行動は関係の安定性を取り戻すために生じると指摘している。この場合、支配的な行動が恋人に受容された場合は恋人との愛着は保たれるが、そのようなふまに効果がなかった時は身体的暴力などの攻撃を伴った支配行動が選択されるとしている (Follingstad et al, 2002)。

2. 研究の目的

愛着の枠組みを依拠した場合、間接的な支配行動である束縛の中でも、弱い束縛は関係維持に貢献している可能性があるが、強い束縛は悪影響を及ぼすと考えられる。束縛の強さが恋愛関係の満足度に及ぼす影響について行為者と被行為者のそれぞれの観点から検証することで、被行為者が支配的な行動を受けているにも関わらず交際が破綻しない恋愛のメカニズムについて示唆的な知見を得ることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 理論的研究

理論的研究として、恋愛関係内で生じる攻撃行動や支配的行動に関する過去から現在までの研究レビュー、及び理論的な枠組みとして愛着理論のレビュー、さらに関連する領域として配偶者維持行動についてのレビューを行った。

(2) 実証的研究

実証的研究として、大学生を対象とした自由記述による予備調査、16歳から29歳までの男女を対象とした2度のWEB調査を行った。

4. 研究成果

(1) 恋人への支配的な行動に関するレビュー及び今後の課題と展望

恋愛関係内で生じる攻撃行動や支配的行動に関するレビュー、理論的な枠組みのレビュー、研究知見の矛盾や齟齬をレビューし、今後必要となる研究について議論した内容を論文として完成させた (片岡, 印刷中)。

(2) 強度が異なる束縛尺度の開発

束縛を測定する既存の尺度のレビューを行い、強度という視点があり用いられていないことを見出した。そこで、項目反応理論を用いて弱い束縛と強い束縛を測定する尺度の開発を行った (Table 1)。14の実態調査と12編の論文から項目を収集し、最終的に82項目を採用した。項目反応理論による分析や因子分析を得て、最終的に「弱い束縛」因

Table1 弱い束縛と強い束縛を測定する項目の選定

番号	項目
弱い束縛 (困難度高) ($\alpha = .884$)	
18	誰と一緒にいるか知りたがる時
7	外出時の目的を聞かれる時
34	他の人と何を話しているのかを気にする時
2	相手の都合で呼び出される時
31	頻繁にデートを強要される時
9	決まり事を作られる時
25	電話の相手を聞いてくる時
強い束縛 (困難度低) ($\alpha = .877$)	
69	勝手に携帯のメモリを消された時
82	恋人以外のアドレスを消すように言われた時
75	無断で携帯のメールをみられた時
79	友だちと楽しそうにしていると、不機嫌になられた時
10	禁止事項を作られる時
6	いつも一緒にいることを要求される時
64	携帯電話の圏外に行くことを嫌がる時

子と「強い束縛」因子それぞれ7項目が選択された。その後、因子構造のまとまりや信頼性及び妥当性について再度データを収集して分析した結果、許容できる範囲の値を示した。開発した尺度の内容や手続きについては、片岡 (2015), Kataoka (2016), 片岡・園田 (2017a, 2017b) において発表を行い、現在学会誌にて査読を受けている最中である。

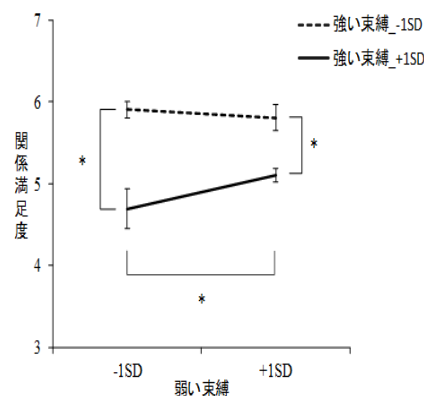
(3) 強度が異なる束縛が恋愛関係に及ぼす2つの影響

開発した束縛尺度を用いて、弱い束縛と強い束縛が恋愛関係に及ぼす影響について、行為経験と被行為経験のそれぞれについて検討を行った。

まず行為経験について、恋愛への関係満足度を目的変数とした重回帰分析により検討した。その結果、弱い束縛が多いほど関係満足度が高い可能性があり、強い束縛が多いほど関係満足度は低いことが明らかとなった。

弱い束縛と強い束縛の被行為経験についても、行為経験と同様に階層的重回帰分析を行った。行為経験と同様に強い束縛が多いほど関係満足度は低かったが、弱い束縛と関係満足度との関連は見られなかった。

被行為経験については交互作用が見られたため、さらに検討を行った (Figure 1)。その結果、弱い束縛が低い場合も高い場合も強い束縛が多いほど関係満足度は低かった。また、強い束縛が低い場合、弱い束縛の多寡



* $p < .05$

Figure 1. 束縛の被行為経験における交互作用の単純傾斜

に関わらず関係満足度に違いが見られなかったが、強い束縛が高い場合は弱い束縛が多いほど関係満足度が高かった。これらのことから、被行為者にとって最も関係満足度が維持される条件は強い束縛を受けていない状態であり、最も関係満足度が乏しくなる条件は強い束縛のみを受けている場合であること、弱い束縛と強い束縛のどちらも受けている場合は関係満足度が保たれることも示された。

束縛が恋愛関係に及ぼす影響についての知見は片岡・園田 (2017a, 2017b) において発表を行い、現在学会誌にて査読を受けている最中である。

(4) 本研究のまとめと今後の展望

3年間の研究期間において、以下の成果が得られた。

第1に、強い束縛は従来の知見と同様に恋愛関係を悪化させるように働くことが確認された。

第2に、弱い束縛は恋愛関係に良好な影響が示された。弱い束縛は、恋人間の興味関心や好意の表れとして機能しているのかもしれない。持続的な恋愛関係の構築を行なう上である程度有効な関係維持行動として機能している可能性が示唆された。

第3に、強い束縛を受けていても、弱い束縛も併せて生じている場合は恋愛関係への悪影響が抑制されることを実証した。ただし、その内実は弱い束縛のみを受けている場合と比べてあまり健全ではない可能性がある。恋愛関係自体は良好であるものの、交友関係の縮小や個人の精神的な健康が損なわれている危険性も考えられる。弱い束縛と強い束縛を同時に受けている者達が、恋愛以外の他の社会的な関係や個人の精神衛生に問題を持つ可能性の検証については今後の検討事項としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

1. 片岡 祥 (印刷中). 恋人への支配的な行動に関するレビューと展望. 奈良保育学院研究紀要.

〔学会発表〕(計 4 件)

1. 片岡 祥・園田 直子 (2017b). 弱い束縛行動と強い束縛行動が恋愛関係に及ぼす影響 日本心理学会第 81 回大会発表論文集, 86, 久留米大学.

2. 片岡 祥・園田 直子 (2017a). 恋愛関係内で生じる弱い束縛行動と強い束縛行動を測定する尺度 日本パーソナリティ心理学第 26 回大会発表論文集, 87, 東北文教大学.

3. Kataoka Sho (2016). The stages of restriction in romantic relationships. Poster session presented at the 31st International Congress of psychology. Yokohama, Japan.

4. 片岡 祥 (2015). 恋愛関係内で生じる束縛を測定する尺度の開発 九州心理学会第 76 回大会発表論文集, 3, 大分県立芸術文化短期大学.

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :

○取得状況 (計 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
取得年月日 :
国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

片岡 祥 (KATAOKA SHO)

西南学院大学・公立大学の部局など・心理学実験助手

研究者番号 : 40643094

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :

(4) 研究協力者

()